
絆 ～鳶と小鳥編～

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆　　ゝ鳶と小鳥編ゝ

【Nコード】

N3776B

【作者名】

佳生

【あらすじ】

欠けた者同士の不可解で危ないやり取り。恋人は狂愛者。その友達は殺人鬼。そして私は。傍にいれば、それで良いと思っていました。

00..欠如（前書き）

上辺だけ、ペラペラ読んでいただけたらと思います。あまり、深く考えていなかったもので……。

00..欠如

あれ。

あれあれ？

？

どうしよう。

どうしよう。

私、何か変だ。

何が変わったっていうとね……と、とにかく変なの。

お気に入りのマグカップ。

エン君に買ってもらった、エン君と買ったマグカップ、持てなくなっちゃった。

重いなんて、考えたことなかったのにな……ん？　そういう事じゃないのかな。

分かんないや。

自分の部屋の扉が開けられない。

大変だ！

これじゃあエン君のいるお部屋の扉も開けられない。

勝手に入ることもできない。

どうしよう。どうしちゃったの、私。私の体。

ねえ、ねえ、動いてよ。

そうじゃないと、エン君に、会えない。

「チミ〜！ ごはんだよ！」

ああっ、エン君が来ちゃう！

今の私を見たら、きっとエン君は心配する。

どうしよう。どうしよう！

「あれっ。どうしたの？ 具合悪いの？ 大丈夫、チミ？」

もう扉の前まで来てる。

「……開けるよ？」

ダメ！ 待って！！

そう、私は叫んだつもりでいたのに。

エン君にすら届かなかった私の声は、控えめに開かれた扉の音にかき消された。

「…………チミ？」

私の部屋に、透き通るように響いたエン君の声。

私は、この声が、大好き。

00：欠如（後書き）

語りの女の子、私は、コトリと言う名前なのですが、ちみっこい鳥、
という事で、チミとなっています。 恋人の名前は、トンビと書
いて、エンと読めます。

01…欠席

何事もなかったように、エン君は笑っていた。

場所は学校。

私とは違って、エン君はちゃんと学校に行ってるんだ。

有名私立高校なんだよ。

一人暮らしで、高校生で、私の……だ、旦那さん。

け、けけ結婚した訳じゃないけどね！

しうねって、約束はしたの。

だから、指輪。ちゃんと指輪してるんだ。

私も、エン君も。

「今日、チミの様子がおかしかったんだ……だから、早く帰らないと」

朝一番に、どうして帰りの話をしてるんだろ。

変なエン君。

「んだよく、朝から帰りの話すんなよな。頑張って学校来てんだからよ」

「……大金はたいて、その態度はないだろ」

「俺、勉強嫌い」

エン君のお友達の、春日野君^{かすがや}。

エン君とは正反対で、明るくって積極的。ちょっとだけ、恐い人。

「……口に出したら心配になってきちゃったよ。あ。帰ろうかな。うん。帰ろう」

「あ、帰んの？」

「先生に言っておいて」

「隣の奴が、」

「恋人が心配で帰りました」
「ってか？」

「別にそう言ってもいいよ。みんな信じないだろうから」

「学校は、成績優秀者の味方だからな。……ちきしょー、じゃな」

「うん。バイバイ」

そう、薄い笑顔で手を振るエン君。

本当に帰るつもりだったんだ。ビックリ。

教室から出ていくエン君を不思議そうに見た子が何人かいたけど、直ぐに見なくなった。

春日野君は、何だか微妙な顔をしている。

エン君、ずる休みはダメだよ。

▽
▽
▽

エン君は、本当にうちに帰ってきた。

そして私の部屋に入ってくるやいなや、ゆっくりと私の手を取り、その体温を確かめるように頬を寄せる。

そうして発した一言に、私は、ほんの少しだけ驚いた。

「計算の通り。これで逃げれないよ、僕の小鳥」

お姫様に、王子様がするみたいに手の甲にキスをして、エン君は小さく笑った。

満足そうな笑顔に、私も笑顔になったはずなんだけど、表情は一切変わってない。

どうやら、薬の効果らしい。

「さて、今日はたくさんはなそう。明日はドレスを着せてあげる。明後日は、少し化粧をして、その次はどうしようか」

楽しそうに話すエン君は、何を考えているんだろう。

うきうきとした声音。

私は、恐くなんかないよ。

エン君はずっと傍にいるもの。

彼が望むんなら、私はどうでもいいんだ。

私はただ、彼を見守るだけ。

「ボクの小鳥。可愛い可愛い小鳥。ずっと一緒にいよう。ずっとずっと」

そうだね。

一緒にいよう。ずっと、ずっとだよ。

「……ずっと。もう、離さない」

そう言って、私を抱き締めるエン君。

何だか、とっても大胆。

恥ずかしいな……。

「よかった。本当によかったと思ってるんだ。君に会えてよかった」

私も、そう思ってるよ。

「でも、小鳥は逃げてしまうんだ。捕まえておかないと、いつか、絶対」

そんな事ないのに。

私は逃げたりしない。

エン君から、絶対に離れたりしないのに。

どうしてそんな事いうのかなあ？

「ボクの、小鳥」

ゆっくりと彼は、確認するように私の手を取る。

そうして、指輪が光る。

金色の、お揃いの指輪。

「ずーっと…一緒」

うん。

ずー
うと
ね。

・

02..欠落

今日も、エン君は学校から早く帰って来ちゃってます。

ホントに、もう……。

「ああ、今日はテストだったからだよ。変なこと言わないでくれ」

てすと？

あれ……でも、でも、昨日、勉強してなかったよね？

「勉強？ 授業で十分だろ」

て、天才宣言だよっ！

私はアタマ良くないからな。

ぼーっとしてるエン君に、私は首を傾げる。

具合でも悪いのかな。

「あー。風邪ひいたかも」

そう言ったのに、エン君は私に毛布をかける。

私はそんなに寒くないんだけどな……。

自分でくるまればいいのに。

「やっぱり、季節も考えなくちゃだな。今度は、長袖を用意するよ」

私を見て、小さく笑うエン君。

言っていた通りにドレスを着せてくれたんだけど……可愛いけど、うゝん。

確かに、ちょっと寒いのかも。

セレブとが着てそうな白いドレス。

「……んゝ。やっぱり、チミは何着ても似合うなゝっ」

んもう！ 何言ってるんだよ！

バシッ、とエン君を叩いたつもりだったのに…体は動かないし叩けないし。

あゝあ。どうしちゃったのかな。

いいけどね。

「ねえ、チミはさあ、ボクのどこが好き？」

いきなり何言いだすんですか。

どこが好きって……。

えっと…エン君がエン君なところが好きだよ。

ってええええ！

恥ずかしいじゃないっ！

うああ。そんなこと、今まで一回も聞いたことないじゃない。

恥ずかしいと言いますか、何ていうか。

「ボクは、チミだから好きなんだ。チミは、ボクの唯一無二だからね」

？

ゆいいつむに？

「たった一つって事」

ああ！　そういう事か！

難しい言葉知ってるね。

「でも、もしかしたら、そう思ってるのはボクだけかもしれない」

そんな事ないよ。

「チミは、ボクの恐さが分かってない。本当のボクを知らないから
…」

知ってるよ。

知ってる。

どうして知らないなんて言うの？

「チミがいるから、ボクは恐くないんだ」

だったら、怖いエン君は見なくていいよ。

私がいるから。

「でももう、心配しなくて大丈夫だ。チミはここにいるから」

そうだよ。

ダイジヨブ。

「チミがいるんなら、いいんだ」

私も、そう。



「いやゝっ、悪いな！」

「……馬鹿じゃん」

テストの最終日、エン君と話していたら、春日野君が家を尋ねてきました。

何だか、バスに乗り遅れたうえに、雨に降られたんだって。

ビショビショ。

「ありえねーとか思わねえ？」

「バスに乗り遅れる方がありえないと思う」

自分で染めたらしい白い髪は、エン君に貸してもらったタオルで覆われている。

「って、実は噂の恋人さんに会えるかなって期待してたんだけど？」

「……………」

屈託のない笑顔で笑う春日野君に、エン君は無表情で紅茶を出した。出された紅茶を小さくすすり、春日野君はエン君を見上げる。

エン君は一瞬だけ無表情だった。

「……………」

しばらく見つめあう……は違うかな。睨み合ってるわけでもないんだけど、そんな感じで、私、ちょっと居心地が悪いんですけど。

隠れてる訳じゃないけど、違う部屋にいるから、春日野君には分からないだろうな。

「ボク、見せびらかす彼女はいないんだけど。……………帰れ」

「うつわゝ、怖。せつかくの美人さんが台無し」

「君のせいだろ……………帰れ」

笑ったまんまの顔で、エン君が怒ってる。見たことないや。

私の中で、エン君は怒らないし泣かない。おっきい声も出さない。

いつもニコニコしてる。

ニコニコ、してない方が珍しいんだよ。

これが、私の知らないエン君なのかなあ。

「お茶出しといて、帰れ、はないでしょ」

「何で？　ここはボクとチミの家だ。ここのルールは君が決めるものでも、常識でもない」

「笑ったまんま怒るって、女の特技だよな」

「ボクは男だ」

「女顔つつてんの」

「帰れ」

「茶あ飲んだらな」

「好きにしろ。飲んだら、即刻、帰れよ。……雨降っててもな！」

バタンツ！　って、ビックリするくらいに力に任せてリビングの扉を閉めたエン君。

直ぐに私の部屋にきて、椅子に座っていた私の手を取り、大きく息

を吐いた。

ホントに、ダイジョブ？

辛そうに眉を寄せ、苦しそうに呼吸するエン君の顔色は良くない。

風邪ひいたかもって言ってたもんね。

だったら、春日野君には悪いけど、早く帰ってもらわなくちゃ。

「ごめんね、チミ。いきなり友達が来ちゃって。驚かせたろ」

ううん。そんな事無いよ。全然。

それよりも、エン君の体調のほうが気になるんだけど。

「いつまで紅茶を飲んでるつもりだ、あいつ」

不機嫌そうにエン君が立ち上がった瞬間だった。

部屋の戸が、五分の一位の角度で開いた。

春日野君。

「《それ》が彼女さん？」

人に対して、《それ》って何だ。失礼しちゃうなあ。

すたすたって歩いてきた春日野君。

「人形じゃん」

人形じゃないですけど。

「良く出来てんな」

「触るな」

人形じゃないってば！

春日野君は、やっぱり私を人形だと思ってるみたい。

どこが人形に見えるのかなあ。

「……ふうん。で、彼女なのか？」

何げにシツコイんですけど。

「……………」

春日野君を睨むエン君。

でも、エン君は一瞬で笑顔になった。

「そうだよ。……分かったんならさっさと帰れ」

「はいはい」

部屋から春日野君を追い出したエン君は、見送りもしないで、部屋に鍵を掛けて、ティッシュで床を拭きだした。

雑巾使えばいいのに。

「勝手に人の聖域に入ってくるなんて」

ぼそっと、エン君が言った。

「ああ……汚いっ」

うん。

エン君と春日野君って、友達じゃないのかな。

・

03..欠損

エン君！ エン君エン君エン君！

助けて！ 誰、あなた！ 何で私を、私だけ連れていくの！

エン君、助けて！！



学校から帰ってきたエン君が、最初にやってきたのは、やっぱり私の部屋。

それから、カバンを床に落として、瞳を見開く。

「……チミ？　チミ、チミ！？」

いつも私の座ってる場所に私の姿がなくて、一瞬、混乱するエン君だったけど、すぐに窓を見る。

綺麗に割られている窓は、明らかに侵入者の痕跡を残してた。

そう。私はそこから連れていかれたの！

「チミ、どこだ！」

靴下のまま、窓の外に出たエン君は、どことも定めずに走りだす。

空は曇りで、昨日のように雨が降りそう。

風邪ひいてるのに……。エン君。

「……つくそ！」

舌打ちをして、でも走るのをやめないエン君。

私には分からないけど、なんとなく、行くところの目星が付いてる

みたい。

と、雨が降りだした。

よりにもよって、とても冷たい雨。

誰も気付いてないけど、だから気付かないんだろうけど、エン君の靴下が、雨と地面のせいで黒くなってる。

反対に、エン君の顔は白くなってるし、切れ切れに吐く息も白い。

私は分からないけど、本当に寒いんだ。

けど、どうにもできない。

私には、見守ることしか出来ない。

エン君が、一刻も早く私を見つけるのを祈るだけ……

「……」

立ち止まったエン君は、ジッと前にあるベンチを睨んでいる。

フードをかぶっているから、誰だか分からないけど、エン君は分かっていた。

「春日野」

「何、鳶^{えん}」

「……春日野」

「どうしたんだよ」

振り返った春日野君は、いつものように笑ってる。

でも、エン君は？

「……お前しか、いないよな？」

「何が？」

強くなってきた雨に、エン君の吐く白い息だけが目立つ。

より白くなった顔が痛々しい。

対して春日野君は、まったく変わらない。

「僕の家を知ってるのは、僕とチミと……春日野、お前だけだ」

そう言われて、春日野君が少しだけ驚いた。

「マジ？ ホントに誰も入れた事なかったのか？ ははっ！ 俺、超レアじゃん」

「それに、もし空き巣だったとしても、チミだけ持ってく訳ないだろう」

「ひひっ！ 確かに、そうだな。その通り」

今、どうして私が春日野君を恐れていたのか、分かった気がした。

この人、春日野君は、きっと普通じゃないんだ。

「……チミを、返せ」

絞りだすようなエン君の声。

エン君が、倒れ……！

「……良く出来ました」

倒れ掛けたエン君を支えたのは、やっぱり春日野君しかいなかった。

.

04..狂気狂喜驚喜凶器兇気恐鬼

あの時はどうなるかと思ったけれども、倒れたエン君は今、ベッドに寝かされて、温かい布団もかけて貰ってます。

なんだかんだで、冷えピタクールも貼ってもらってるから、すぐに良くなると思うんだけどな。大丈夫だよ、エン君。

すぐ近くに居るエン君だけど、薄いカーテンのせいでよく見えない。私って、やっぱり隠されてるんだよね。

エン君、気付いて！

「よう、鳶。起きたか？」

「春日野……」

「無理すんな。無理して引っくり返んのはお前だぜ？」

「どこだ、ここ」

起き上がろうとしたエン君に、春日野君は小さく笑いながら言う。

それに眉を顰めながらもエン君は春日野君に言われた通りに無理やり起き上がろうとはしなかった。

「俺の家。カッキーだろ」

「ただのコンクリートの塊が？」

「温かみなんて、俺は必要としてないからな」

肩をすくめる春日野君。また、あの恐い感じが彼の周りを漂い始める。

最初から警戒した様子だったエン君は、今度こそ起き上がる。

冷たそうな床に足をおろし、春日野君を睨んでる。

私の見たことない顔。

「暖かいつてのは、温いつて事なんだよ。俺がほしいのは、このままじゃいられなくなるほどの熱さなんだよ、鳶」

「で？」

興味などない、警戒だけの視線を向けられ、春日野君は肩を竦めた。

「そう！ それがいいんだよ、鳶。その目。お前の顔《表情》が見たかったんだよ」

「変体じゃないか」

「分かんねえだろうな。お前の顔、綺麗過ぎるんだって。無表情が似合うんだ。最初は違う表情になれば変わると思ってた……けど、どれも綺麗で……」

立ち上がった春日野君。

エン君は、額のヒエピタを剥がして、そこら辺に捨てる。

「だったら、一層、歪んだ表情にしてやろうと思ったんだ。なあ……」

「断るっ！」

ビックリするくらいの速さで、エン君が春日野君を蹴り飛ばした。

こんな事をする人だとは、出来る人だとは思っていなかった。

その蹴りを避けた春日野君にエン君は明ら様に悔しそうな顔をして舌打ちをした。

また、私の知らない顔が見えた。

私は、エン君を知らなかったって事？ そんな事ないよね？ ね、エン君。

「おいおい、そんなんで俺にかかってきたのか？ 面白え奴」

けらけら笑う春日野君を前にし、エン君は、二・三步よろめいた。

顔色が悪いほうに戻ってる。

どうしよう、エン君！

「そんなんじゃ、愛しのお姫さまは取り替えせねえぞ。けけっ、残念だったな」

お姫さまって、私の事？

それ以外考えられないもんね。

「な…チミが……？ やっぱり、お前」

「あそこにいるぜ。ご丁寧に、扱ってますよ、お兄さん」

「ふざけるな………っぐ!？」

また春日野君に飛び掛かろうとしたエン君の首に、春日野君の手が引っ掛かる。

そのまま足を引っ掛けて、エン君を転ばせた春日野君は、そのまま手に力と体重を乗せて、エン君の首をしめる。

ぎりぎりとしまってゆく首を一周する掌に、最初は目を瞑り耐えていたエン君の表情が徐々に苦痛に染まってゆく。

薄く開いた口からは、とても呼吸だとは思えない、喉を空気が通過する音が漏れていた。

脂汗が滲んで、叫ぶように開かれた口からは、さっきよりも細かい音が、風の音のように響いている。

それを見て、笑っている春日野君は、とても恐い。笑うピエロのお面を被っているみたいで、私はとても恐い。

でも、このままじゃ、エン君が……。

「……あ……っ」

小刻みに震えるエン君の目が、こっちを見た。

カーテンの下側にある隙間から、私の足が見えたんだと思う。

そう、私はここ！　ここだよ、エン君！

待ち焦がれるように、凝縮された思いが、一気に高まって、エン君に向けられた。

エン君の手が、私の方に伸ばされて、床に指を食い込ませるように、握りこまれる。

光った、指輪。

私の薬指にもある、指輪。

エン君！

「……。……。ああ、そーゆー事」

私が手を伸ばした瞬間、私たちを隔てていた灰色の布が、バサリ、と舞い上がって道を開けるように左右に退いた。

その様を目の当たりにした春日野君は、恐がる素振りなど見せる事無く、何かを納得したようにエン君の首から手を離し、立ち上がって私を見る。

笑って。

「そーだな。あんたが壊れたら、鳶はどんな顔するだろうな……。見てみたい」

咳き込んでいたエン君が、はっと顔を上げて、私と春日野君を見た。軽い音の割りには、すごく大きくて頑丈そうなナイフをベルトの後ろから取り出した春日野君が、ゆっくり歩いてくる。

よろめきながら、エン君は春日野君に体当たりした。

けれども、力の入らないエン君では、春日野君をよろめかせることも出来ない。

それでも、ナイフを持つ手にしがみ付くエン君に、春日野君は躊躇いもなく、ナイフを振り上げた。

滑らかな一線とは思えないほどに、深く脇腹から肩に斜めに裂かれたエン君は、二・三步後退して、膝をつく。

「死ぬなよ、まだ」

傷を押さえるエン君を鼻で笑って、春日野君は私に黒いナイフを見せ付ける。

「コンバットナイフって言うんだ」

笑った瞬間、そのナイフは、小さく動き続けていた私の心臓を深く貫いた。

それは、私を体に縛り付けていた、一種の鎖。

白のドレスが汚れてしまったのは、とても悲しいけれど、私は、束縛と抑制から逃れられた。

だから。

「人形じゃ無かったのか……お前も大概クレイジーだな」

「小鳥…春日野ああっ!!」

ナイフをクルクルと回して振り返った春日野君に、エン君はまた掴み掛かる。それはさっきのものとは全く逆で、凄まじい力に、春日野君も驚いていた。

しかし、そこまででエン君の力が底をつく。

文字通りに血の道を作って走ったエン君の体には、生きていられるギリギリの血液しか残っていない。

「おー、びっくりした。何なんだよ。……でもま、いっか。こんな顔、見れたしな」

けけけ、と笑う春日野君。

ナイフを振り上げたけど、エン君は殺させないよ。

「動くな!」

「!?!」

聞き覚えのない声と共に、弾丸によって弾かれたナイフを、私は目で追った。

警察の人が何人も何人も踏み込んできて、春日野君を完全包囲。面白そうに苦笑した春日野君を、押さえ込むようにして連れていく。

エン君は、救急隊員の人達に、救急車に乗せられて病院に出発。

私は、自分だったものを眺めていた。

すると、一番最初に踏み込んできた若い感じの刑事さんが、私だったものの指から、指輪を抜き取り、私を、確かに私を視た。

「救急車に乗っていった男の子に、渡せばいいんだな？」

真剣に私を視た、その人が何ものかは分からない。

けれども私は、確かに頷いた。

.

05..欠片

寝たり起きたりしているエン君は、ぼんやりとしているばかりで、あれから一言も話していません。

刑事さんに、お医者さんは

「精神的ショック」

と言っていますが、そんな事はありません。

エン君は、話す必要が無いから、私が居ないから話さないだけ。

「……………こんにちわ」

「…どうも」

刑事さんが、初めてエン君と話をしたのが、今日でした。

刑事さんはお仕事が忙しくて、夜にしか来られなかったから。

「君に、これを返しにきた」

コートの裾から出されたそれを見て、エン君は初め、何だか分からなかったらしく、ぼんやりと刑事さんの掌を眺めていた。

一向にそれを取ろうとしないエン君に、刑事さんがエン君の手をと

り、その隣に手を並べる。

エン君の指にはめられた、金色の指輪。並ぶ、私の指輪。

エン君の表情が変わって、指輪を取ると、指輪をしていない側に、私の指輪をはめた。

そして、その時の表情といたら……――

「仕事があるから。今日は帰る」

「……。……有難うございました」

「あ……。ああ」

ぽつりと、お礼を言ったエン君に驚いた刑事さんは、最後に私に手を上げて、病室から出ていった。

そして、振り替えると、エン君が、ようやくと、私を見てくれた。た。

私たちの絆は、金色の指輪。

私たちを繋ぐのは、指輪。

『私、逃げないよ、エン君』

「そうだな、チミ。居たの、分からなかった」

『えへ。……もう、寝なよ、エン君。ちゃんと寝てないの、しつて
るよ。寝れてないの、見てたから、寝なよ』

「うん」

大切そうに手を手で包んで眠ったエン君は、とても安心したように
目を閉じた。

その様子を眺めながら、私はエン君の髪を梳く真似をする。実際、
触る事はもう出来ないから。

触れる事が出来ないのは、すごく悲しい。けれど、涙も、もうでな
い。

『エン君、大好きだよ』

言葉でしか、気持ちは伝えられなくなってしまった。

一緒にいられるだけで、それだけでも良いと思っていたけど、それ
は違うんだ。

私は、エン君と手を繋いだり、抱き合ったりしたい。

今までみたいに、そうしたいけど……。

「んなら、鳶、殺してやるけど?」

その薄い笑いと、独特の空気に、私は振り向く。

私の姿は彼にも見えているようだ。

けど、なぜ、ここに……?

どうしてここにいられるのかが分からない。

彼を束縛していたモノは、どうなったんだろう。

「よ。一週間ぶりくれえ? 相変わらずだな」

染められた白い髪、それに赤いコート。

春日野君は…、コートの中に色々としまっているようだった。危ないものが、たくさん見える。

「ああ、これは全部、警察の皆さんに貰ってきたんだ。すげえよ、押収した刃物とか、銃とか……刃物はナイフばっか貰ってきたし、ピストルにしたって、本体一個に銃弾は箱で貰ったから、軽いものだぜ」

一回、軽く跳ねた彼が地面に足を付けると、反動でコートがジャラ

リとなった。

あのコートの耐久性もそうだけれど、かなりの重量になったコート軽々と着こなしている春日野君もすごいと思う。

「格好いいから、こんなん貰ってきたけど…知ってるか？ 堂々としてりゃあ、結構、バレねえんだ」

そう言って私を擦り抜け、眠るエン君に突き付けられたのは、長い日本刀。しっかりと油が引いてあって、手入れをされているのが分かる。

「格好いいだろ？」

ニヤリと笑った彼に、私は表情を固くするしか出来なかった。

けれど、エン君は違う。

「……別に」

指先で切っ先をずらして起き上がったエン君は、眠そうな表情のまま、窓の外を見る。

「まだ暗いじゃないか。何しにきたんだ、殺人鬼」

「虐殺ついでにお前を殺しにきたんだよ、狂愛者」

「暇だな、お前」

「そうでもない。俺、今指名手配犯だからよ」

日本刀を引っ込めて笑う春日野君。

どうしよう、どうしたらいい？ エン君が殺されちゃうよ、どうしよう！

そこで、目に入っただのは、備え付けの花瓶。

日本刀から、黒い刃のナイフに持ちかえた春日野君が、エン君の胸ぐらを掴んで、首筋を浅く裂く。

僅かに流れる血に、私は全てが怒りの感情に染められた。

『エン君に触らないでえええっ！！』

叫んだ拍子に、病室の窓ガラスが粉々に碎け散った。そして、防がれてしまったけれど、花瓶は春日野君の腕に当たって、黒刃のナイフを取り落とさせる。

同時にナースコールを押したエン君は、私に小さく笑ってくれた。

「ちっ。白けるなあ。まあ、いいや。……俺から逃げれると思うなよ」

何故か満面の笑みを残して去っていった春日野君とすれ違うように、数人の看護師さんが病室に入ってきた。

その前に、エン君は黒刃のナイフを小棚に隠して、看護師さんの質問に答えながら、首の傷に絆創膏を貼ってもらっている。

あまり細かいところまで話をしていないエン君は、薄く笑顔を作っていた。

その笑顔の意味が、私には少し分からない。

『チミは本当の僕を知らないから……—』

本当のエン君。

それがどんなエン君なのかも結局分からない。

でも、いいのかもしれない。

時間はまだまだ、
本当にまだまだあるから。

・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3776b/>

絆 ～鳶と小鳥編～

2010年10月28日05時31分発行